令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：32689

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00685

研究課題名 古代東アジアにおける「境界」領域の人々と地域の国家的支配に関する研究

研究代表者

柿沼 亮介 (KAKINUMA, Ryosuke)

早稲田大学・高等学院・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000円

研究成果の概要：本研究では、古代日本の「辺境島嶼国」を比較することで古代国家の「境界」地域の支配のあり方を炙り出すことを試みた。律令制下の日本においては、舌岐、対馬、夕奈（種子島、屋久島など）、値嘉（五島列島）に「嶋」という令制国に準ずる行政区画がおかれた。これらの設置や廃止の状況について検討することで、「辺境島嶼国」が対外交渉上の要地に設置されたことや、その存廃には古代国家の支配体制の変質が関係していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで個別に検討が進められてきた「境界」地域の支配について、「辺境島嶼国」という枠組みを設定することで統合的に把握することを試み、その結果、古代国家の変質と「辺境」支配の関係を指摘した点に学術的意義がある。また、「境界」領域における国家の支配に注目することで、前近代における「国境」や「民族」のあり方を相対化して理解する視座を提供した点に社会的意義がある。

研究分野：日本古代史

キーワード：辺境 対馬 南島 五島列島 地域支配 対外交渉

1. 研究の目的

前近代の国家の「国境」概念は近代国家のものとは異なり、また「境界に生きる人々」は特定の国家への帰属意識を持っていたわけではないという発想は、歴史学の世界では一般的である。しかしながら歴史教育において、この点は十分に強調されてこなかった。日本古代史の泰斗である関晃の有名な言葉に、「われわれの祖先が帰化人を同化したというような言い方がよく行われるけれども、そうではなくて、帰化人はわれわれの祖先なのである。」(『帰化人』1956)というものがある。ところが歴史教科書において渡来人(帰化人)は、「先進的な文物をもたらした朝鮮半島や中国大陸出身者」という趣旨で記述されているのみで、生徒は渡来人を「外国人」として認識しがちである。関の言葉を踏まえると、渡来人についての理解として問題があるといえよう。

ここで注目されるのが、「境界」領域の人々や地域である。「辺境」地域やそこに生きる人々、さらには渡来系移住民のあり方は、国家による支配が全国統一的、一元的なものではないことを考える上で好適であるといえよう。これらについて検討し、さらにはその視点から歴史教育における「境界」領域の扱いについて見直すことは、国家の枠組みに関する理解を相対化することにつながるものである。そこで本研究では、「境界」領域における国家の支配について検討することで、前近代における「国境」や「民族」のあり方を相対化して理解する視座を提供することを目的とする。

2. 研究成果

本研究では、外交使節の来着地における地域支配のあり方や、在唐新羅人と日本や新羅の遣唐使の関係などを検討することで、古代国家の外交権や、在留外国人および渡来系氏族の支配に顕れる古代東アジアの国家権力の限界について解明することを企図した。しかし2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で海外調査の実施が困難になったことから、国内の「境界」地域における地域支配に注目して本研究の目的の達成を目指した。

(1) 辺境島嶼国の比較

古代日本の「辺境島嶼国」を比較し、翻って古代国家の「境界」地域の支配のあり方を炙り出すことを試みた。律令制下の日本においては、行政区画として佐渡国・隠岐国・淡路国・壱岐嶋・対馬嶋・多嶺嶋・値嘉嶋(五島列島)という島国が存在した。これらのうち佐渡・隠岐・淡路は「国」とされ、壱岐・対馬・多嶺(種子島、屋久島など)・値嘉(五島列島)は「嶋」とされた。

このような違いが生じる理由に注目すると、財政規模の違いがみられることがわかる。『延喜式』にみえる令制国の等級と『和名類聚抄』にみえる郡・郷の数を整理すると、次のようになる。

佐渡国(中国) 3郡 22郷	隠岐国(下国) 4郡 12郷	淡路国(下国) 2郡 17郷
壱岐嶋(下国) 2郡 11郷	対馬嶋(下国) 2郡 9郷	多嶺嶋 4郡 5郷
値嘉嶋 2郡		

多嶺や値嘉は『延喜式』の段階では廃止されていたため等級はみえず、また値嘉の郡の数は『日本三代実録』の値嘉嶋設置記事による。

このように、「国」とされた佐渡・隠岐・淡路は郡や郷の数が多く、また佐渡にいたっては「中国」とされている。それに対して「嶋」とされた壱岐・対馬・多嶺・値嘉は郡や郷の数が少ない。さらに、壱岐や対馬などの経営に際しては西海道内の他の諸国に経済的に依存していたことがうかがえる史料も散見される。

また、こうした特殊な行政区画は9世紀に入ってから停廃されたり新設されたが、対馬や壱岐は一貫して「嶋」として維持された。対馬・壱岐は朝鮮半島との通交上の要地であり続けたのに対して、南島地域は、隼人への支配の変化や遣唐使の航路の変化などにより政治的重要性が低下したことによると考えられる。五島列島には値嘉嶋が新設されたが、これは中国商人や新羅商人の活動の活発化を背景としている。

こうしたことから、「嶋」は対外交流上の要地で、かつ自立した経営が行えない場合に設置されたと考えられる。

(2) 「辺境」支配の変質

多嶺嶋は8世紀の初頭に設置され、824年に廃止されたが、これは日本の律令国家が目指した「帝国」構造の変質と「辺境」支配の伸長・弛緩の間の相関を表している。7世紀末から律令国家は「帝国」型の国家を目指し、朝鮮半島諸国や蝦夷・隼人などとの関係を規定していったが、多嶺嶋も「帝国」を目指す政策の一環として設置されたと考えられる。しかし9世紀に入

って「帝国」構造の清算が進む中で、多嶽嶋も廃止された。また9世紀には対馬などの在地勢力が新羅と結ぼうとしたと考えられる事例がみられるようになる。

これらの研究成果を肥後に設置された古代山城である鞠智城の機能の変遷の分析に応用し、古代国家の「辺境」支配の変質について検討した。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 柿沼亮介	4. 巻 9
2. 論文標題 古代国家による辺境支配と鞠智城の機能の変質の相関	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鞠智城と古代社会	6. 最初と最後の頁 25-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柿沼亮介	4. 巻 35-1
2. 論文標題 対馬をめぐる「国境」認識の歴史的展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 13-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------